

ロール・モデルとしてのメアリ・ライオン

—『メレイライオン一代記』を中心として—

戸 田 徹 子

山梨県立女子短期大学 国際教養科

Mary Lyon as a Role Model

An Analysis of *Mereiraion Ichidaiki* (1883)

Tetsuko TODA

Department of International Studies, Yamanashi Women's Junior College

Mary Lyon is one of the leading American educators in the first half of the 19th century and the founder of Mount Holyoke Seminary. Her seminary was a model for evangelical education for women where Lyon instilled the students with the fear of God and the subordination of self to the welfare of the community. The religious commitment which Lyon infused sent many of her students to heathen lands as missionary wives and later as missionaries. Thus, Lyon contributed to the Protestant foreign mission, while promoting the higher education of women. Lyon became a role model for Christian faith and benevolent activism to female foreign missionaries in general as well as to the graduates of her school. Lyon's biography was translated into Japanese and published in 1883. This paper investigates into this Japanese version of Lyon's biography and analyzes the messages which foreign missionaries to Japan intended to transmit to Japanese women through her life.

Keywords: Mary Lyon (メアリ・ライオン), female seminary movement (女子セミナリー拡張運動), Protestant foreign mission (プロテスタント海外伝道), missionary woman (女性宣教師), Japanese woman (日本女性)

はじめに

明治期日本におけるプロテスタント系女学校の設立がアメリカの女子セミナリー拡張運動の一貫をなすことは、比較教育研究や各個ミッション・スクールの百年史においてすでに指摘されている。なかでもマウント・ホリヨーク・セミナリー（1837年創立、1892年大学昇格）に言及されることは多く、同校出身の女性宣教師を通した人的つながりや、教育目的や教育課程等の類似性が明らかにされてきた。ところで、この学校の創設者であるメアリ・ライオン（1797年—1849年）の伝記は、『メレイライオン一代記』として、早くも1883

年（明治16年）に「米国遣伝宣教師事務局」から出版されている。ライオンはより高度な女子教育を求めた指導的教育者としてマウント・ホリヨーク・セミナリーを設立したばかりでなく、海外伝道のよき支援者として、多くの卒業生を伝道地に送ったことでも知られている。その影響力の大きかったことは、海外伝道に貢献した28人の女性を紹介した *Eminent Missionary Women* (1898)¹⁾ のなかで、海外伝道に直接たずさわったことはなかったにもかかわらず、ライオンの肖像画がその口絵を飾り、かつ彼女が最初の登場人物となっていることからうかがえよう。まさにライオンは女子教育と海外伝道の接点だったのである。19世紀のアメリカにおいて、女子セミナリーは教育の

場であると同時に、女性から女性へメッセージを伝える場でもあった。女子セミナー拡張運動の推進者たちは学校という場を借りて、それぞれ次代の女性たちや異国の女性たちに、自分の信仰や生き方を伝達しようとした。そこで本論では、このような女子セミナーを主たる活躍の舞台とし、海外伝道にも貢献の大きかったメアリ・ライオンに注目し、日本語版ライオン伝に強調されている教えを抽出することによって、日本女性に伝えられたプロテスタント・キリスト教の性格の一傾向を明らかにすることができるのではないかという立場から、その内容を検討し、考察を加えたい。それは取りも直さず、多くの女性たちを鼓舞し伝道地に送った人物の伝記の中に、海を越えて日本にきた女性宣教師たちと、彼女たちに連なり女子教育に邁進した日本女性たちの思いを知る手掛かりを得ようとする試みに他ならない。

出版目的と出版時期

その死後まもなくライオンの伝記は、アマースト大学の教授で化学と自然科学を担当し、後に同大学の学長となったエドワード・ヒッチコック (Edward Hitchcock) によって編纂された。ヒッチコックはマウント・ホリヨーク・セミナーの支援者としてその創設運動に参加し、長きにわたり理事をつとめていた (1836年—64年) ばかりでなく、実際に同セミナーで解剖学を講じた人物であった。さらに彼の妻は、ライオンのアマースト・アカデミー在学以来の友人、オーラ・ホワイト (Orra White) だった。ライオンはセミナー構想をまとめるときも一時期ヒッチコック宅に寄宿していたのだが、ライオンの伝記はこのように彼女を公私ともによく知る人物の手でまとめられたのであった²⁾。ヒッチコック編著の *The Power of Christian Benevolence, Illustrated in the Life and Labors of Mary Lyon* (1851) は後に、版權がアメリカ・トラクト協会に委譲され、編著者名を削除し、マウント・ホリヨーク・セミナーについての詳細を省略する形で書き改められ、同協会から1858年に出版された³⁾。日本語版の『メレイライオン一代記』は144ページの小冊子にすぎないものであるが⁴⁾、これは後者のアメリカ・トラクト協会版のライオン伝をさらに大幅に簡略化して翻訳

した上で、あらたに付録を加えたものであると推測される。この本が日本語に抄訳されるに至った経緯や翻訳者等は現時点では不明であるが、日本語版ライオン伝の出版目的は極めて明確である。その緒言に、同性のために「未曾有の学校」を創設した「近世の偉婦」であるメアリ・ライオンの功績を広く知らしめることによって、「もし果して氏が精神のある所を認ることを得ば庶幾はその所業を補益することあらん」(4頁)と記されているように、この本は女子教育の発展を願って出版されたものであり、さらにこの意図は、アフリカでライオン伝を読んだ人物が女学校を開設した話を収めることで補強されている。このような出版目的からすれば、その出版年も注目に値する。1883年(明治16年)は鹿鳴館が開設された年であり、その後数年間にわたり華やかな欧化主義の時代が続く。このような時代風潮にのって、プロテスタント系女学校は隆盛を極めつつあった。既存の学校が拡充整備をはかり、学生増をみたのに対し、新しい学校も各地に創設されていった。日本人による自給自営のプロテスタント系女学校の試みもすでに始まっていた。すなわち原女学校(明治9年9月開校、11年7月閉校)、桜井女学校(明治9年)、梅花女学校(明治11年)の開設がそれである。鹿鳴館時代末期にはキリスト教系女学校(プロテスタント系とカトリック系の両者を含む)の数は、統廃合されたものを除いても、50校を上回っていた。1889年(明治22年)末の官公立女学校の総数が9校にすぎなかったことと比較すると、この数字はキリスト教系女学校が当時の日本の女子教育に占めた勢力の大きさを物語っている⁵⁾。それゆえこのライオン伝の出版はまことに時機を得たものであり、そこにこめられた期待も由なきものではなかったといえるだろう。

立志の人として

ここではまず『メレイライオン一代記』の構成を簡単に紹介しておきたい。その内容はおおよそ3つに分類できる。第1章から第9章までは、ライオンの生い立ちとマウント・ホリヨーク・セミナー創設に至るまでの苦労話である。ライオンは父親を早くに亡くし、貧しい家庭に育ったが、苦学して教師となった。彼女は自分自身が有能な

教師として評判をえたことに安住せず、同様な境遇にいる女性たちに教育の機会を与え、教師としての自立の道を用意してやるべく、不屈の精神でセミナー開設を実現した。ここにおいてライオンは立志の人として描かれている。第10章と第11章においては、セミナーで宗教が重視されたことが強調され、宗教と教育が一体化した学校の様子が紹介されている。聖書の講義や朝夕の礼拝、学校規則等を通して、ライオンが学生の信仰生活に常に心をくばっていたことが明らかにされる。最後は付録部分で、卒業生たちのライオンに関する思い出、アフリカの女学校の話、そしてライオンの朝の礼拝での講話等が収められている。次に各部分を詳しく検討していくことにする。

ライオンの生い立ちはまずその母親に関する記述から始まっている。ライオンの母親は娘時代に回心の経験を得て、19才で結婚したが、結婚生活19年にして夫を病気で失う。このときライオンは6才だった。母親は9人の子供を養育しなければならなかった。地味の肥えた土地柄ではなく、食料や衣類を自給自足しながらの、きわめて質素な生活ぶりだったが、母親は貧しい人々への施しを忘れなかった。「万事を神に任せて」(5頁)、「朝な夕なに必ず其子とともに聖書をとって」(9頁)、子供たちをよき信者に育て上げた、学問はないが敬虔で賢明な母親像がここには描かれている。ライオンが13才の時に母親は再婚した。ライオンは長男とともに残り、しばらく家事を担当していたが、兄が嫁を迎えたことにより、17才のときに家を離れて教え始めた。しかし自分の知識が足りないことを自覚し、兄の手伝いをしていたときにもらっていた月々4円の報酬を貯めていたものを元手に、20才で中学校に入学した。これ以降、ライオンは教職については学資を蓄え、断続的に様々な学校で学んでいく。もとより学費は十分ではなく、衣服は「自製の甚だ粗悪なもの」(18頁)であり、職人のところでアルバイトをしたこともあった。

ライオンが女性の能力の開花に目覚めたのは、24才で高等学校に入ってからのことだった。この学校の教師は当時の著名な教育者(ジョセフ・エマソン)⁶⁾で、彼は女生徒たちに「男に均しき性格をもちたることを覚えその智識を発達しめて卑屈に安んぜざらしめんとせしなり」(20頁)と、

男性と同様な知力を女性も有することを説き、女子教育に貢献した人物であった。ここでの教育を通して、女性の知力が男性に劣るという考えは偏見にすぎないことを知ったライオンは、「是より専ら婦女子の謬見を回復することに心を用いた」(20頁)という。またこの教師の下で、ライオンは「人の為にはたらくべき能力」(21頁)を養った。しかしながらライオンがこの学校で学んだのはわずか6か月間にすぎず、学資がなくなると、再び教職に戻らなければならなかった。自分自身が教育不足を感じていたこと、エマソンのような優れた教育者との出会い、さらに女子セミナーで教鞭をとるようになった経験から、ライオンは次第に女子教育の志を抱くようになった。それゆえライオンは「其身の独身にてはたらく事は特に神より命たることと思えば」(25頁)との理由から、何度か結婚話を断っている。ライオンは、姪に、「倩々世間のありさまを見れば人のために労苦く者は甚だ少なく就中婦女子の為に労働く者はほとんどなきものの如しこれ一日も忽にすべからざることなり故に尤も須要なることは此等の者を養成すべき事なり」(24頁)と書き送っている。ライオンは自らが教師として女性に教えるばかりでなく、女性教師を養成するレベルの高い学校の構想をもち、これを実現することこそが自分の使命であると確信するようになっていく。

しかしながらライオンが実際に「婦女子のために大なる学校を起しかれらの学芸を高尚ならしめん」(36頁)ことに向けて行動を開始したのは、37才のときだった。このとき、ライオンは健康な身体に恵まれ、自然科学も含めた学問一般の知識を有し、これまでの教歴を通じて名望と信任を獲得していた。世情にも通じ、人々を動かす術を知っていた。そして何にもまして「信仰と勇奮の氣象」(36頁)をもっていた。すでに幾つか女子セミナーで経験を積んだので、規則、教授法、校舎等については、自分なりの構想をもっていたという。かつてライオンは、あるセミナーで、生徒たちに出エジプト記3章の11、12節を読み聞かせ、モーゼが年40才にして荒野にだされ、その後イスラエルの人々の指導者となるまで長い間神に試されたことについて、「おほよそ人の此世にありて大功をたつるものは神これが為に其者をして予め其備をなさしむなり」(29頁)と語り、「故に汝等の中も

し大事業をなさんと欲て或は故障に出逢い或は資力に乏しくして直に望の達ざる事もあらんされども志を挫くべからず此時は只神より其事業を己に賦与られたることと思ひ忍びて時期を待つべきなりこの故に荒野の後にありとも決して恐懼るるなかれ其場に久しく留めおかるとも無聊き思いを生ずるなかれそは神は其事業につきて如何なる予備が要用なるかよくこれを知り玉へばなり」(31頁)と説いた。いろいろな学校で教えていた期間を、おそらくライオンは自らも試され、待たされていた時期として回顧していたのだろう。一方、「全く神の特に己を選みたまひしこと」(36頁)という使命感に、ライオンは臆することなく、学者やお金持ちたちとの出会いを求め、賛同者を募った。

ここに語られているライオンの人生は決して楽なものではなく、教職についたのも、客観的にみれば、自活の必要に迫られていたからだった。当時のアメリカ合衆国において、教職は、女性が自尊心を失うことなく続けられる唯一の職業だった。しかしそれとて実力が十分だったわけではなく、知識不足を自覚し、学資を貯めては学校にいくという苦学の道を選ばざるをえなかった。ライオンは自らの努力により有能な教師として名声を得たわけであったが、これに満足はしなかった。自分の経験から、そしてよき師との出会いによって、女性の知力を知り、女性のために働く人材、具体的には女性教師の養成を、自分の使命と感じるようになったのだった。ある年、ライオンは、卒業しこれから世にでる生徒たちに対して、自分の任務を自覚し、何事か成さんとする場合には、慎重に事を決し、なおかつ忍耐することが必要なことを説き、「何事を行すにも其はじめ自から先づ心に其ことの真理に属へるか或は欲望に属するかを明に解すべし。神道学事或は誘導等に関わることは軽忽することなくよく意を用いて鄭重にあつかうべし所途の事業ははじめに確乎たる目的を立て決して惑うことなく服役すべしそは汝等そのとき他に如何なるよき思ふ事を見るときは省みて神の汝等に負担せしむることを耐忍して遂げよ」(33頁)と述べているが、これはまさにライオンが女子セナリーを創設する際にとった方法に他ならなかった。

信仰と教育の一体化

ライオンの長年の願いがかなって、設備等はまだ十分とは言えないながらも、マウント・ホリヨーク・セナリーは80名の生徒をもって1837年11月に開校した。第10章と第11章では、この学校の初期の様子について語られている。教育課程や授業科目については、「生徒入学の期を三年とす科目の如きはグreek学及び算学の他は男子のために設し所の大学校に比して少しも劣りしことはあらざりき」(47頁)ことと、生徒は3つの授業科目とり、授業時間は30分ないしは1時間であることに言及されているのみで、その内容は信仰に関することを主とし、セナリー教育の中心が「学術」よりも信仰にあったことが強調されている。

女子セナリーを得て、そこに生徒たちを迎えることができたことは、ライオンにとって、全く神の思召しによるものであり、それゆえ「もしこれらの者をして神の真の子となさざる時はその旨に悖る」(56—57頁)ことを恐れた。学識はあくまで「神のために活用すべき」(57頁)ものだった。したがって、生徒たちの学習の進展が著しくとも、彼らを信者となし卒業させるのでなければ、それは単に「皮相の隆盛」(85頁)でしかなかった。それではこの学校においてどのような形で宗教教育がなされていたのだろうか。この本によれば、礼拝は毎日3回行われている。まず朝の礼拝では全生徒が一か所に集まり、ライオンの話を聴く。その後、生徒たちは分かれて各自別室に入り、30分間、聖書を読み、祈り、神と共にいる時間をもつ。一人でいるときには、多くを読むのではなく、言葉巧みに祈るのではなく、「靈魂の養い」と「只懇切に祈り且感謝して己が求るところを神につぐる」(62頁)ことが目的とされた。夕方には、生徒が3、4人のグループに分かれて、15分間の祈禱の時間がもたれた。このように礼拝は、個人、グループ、全校の3段階に分かれて日常的に行われていた。この他、日曜日にも、ライオンは生徒全員を集めて、聖書を説き聞かせた。ライオンの生徒たちを導くやり方は、「恰も農夫のはたらきの如し」(65頁)で、まず荒れた心を耕して種を蒔き、よく世話をして、成熟するのを待って収穫するというのであった。ライオンは生徒に対して母親の

ように接し、一人一人の事情を配慮しながら、十分に時間をかけてその成長を見守ったがゆえ、卒業時には大部分の生徒が信者となったという。また教師たちも生徒を信者となすという教育目的において一致しており、ライオンは同僚教師に対しては指導的立場にありながらも姉のように接していた。教師と生徒の関係、教師同士のつながりはことごとく麗しいものとして描かれ、ここにライオンが理想とした信仰と教育の一体化が図られたのであった。

マウント・ホリヨーク・セミナリーの働きは学内で生徒たちを信者になすことにとどまらず、外部に向かって発揮されていくことになる。海外伝道がそれである。この本では、卒業生と教師の中から多数の宣教師が生まれたことや、学内の支援態勢等が紹介されている。伝道はこのセミナリー設立の大きな目標の一つだったが、それはあくまでアメリカ国内のみを視野に入れてのことであり、海外伝道までは考えていなかった。しかしながら伝道のために献金することは、常に奨励されていた。後に卒業生の中から海外伝道に赴く者が現れるようになった。ライオンと卒業生の関係は「母子の如く」であり、ライオンは卒業生を「学校の子」(76頁)として遇していたがゆえ、各伝道地から便りが届き、これが刺激となってさらに多くの学生が海外伝道を志すようになっていった。その情報交換の盛んな様は、「祈禱の会には宛も世界中の人々があつまれるが如く」(76頁)であったと表現されている。それゆえライオンも海外伝道を重視するようになり、「外国伝道会社」も宣教師派遣に助力してくれるようになった。次第に教師の中からも宣教師を志願する者が現われた。教師が辞めれば学校に不都合が生じるのを承知の上で、ライオンはフィデリア・フィスク⁷⁾や自分の姪を、「彼の地にこの人を得ることに比ぶれば決して困却のことにはあらず」(78頁)との思いで、快く送り出してやった。

セミナリー開校後もライオンの苦労は絶えなかった。学校を維持するために、ライオンは授業ばかりでなく、会計や家事指導等を引受けていたが、激務であったにもかかわらず、自ら望んで安い給料しか受け取らなかった。教師たちが海外伝道や内国伝道のために転出すると、人員不足から、身を粉にして働かなければならず、次第に健康を

害していった。身体が弱くなっていたところに、生徒から丹毒病が感染し、ライオンは1849年3月5日に亡くなった。享年52才であった。

付録部分について

この論文では109ページから最後までを付録部分とみなすことにする。正確には「創業より今日迄入学生の概算」は付録ではなく第12章として独立した形をとっているが、アメリカ・トラクト協会の1858年版のメアリ・ライオン伝を参照し、日本語版を編纂する際にあらたに加えられたと推測される部分は付録として扱っていく。表題は収録順に、「本校卒業生の或人々近來親睦会を開きしこと」、「創業より今日迄入学生の概算」、「亜非利加州に莫倣学校の開けしこと」、「メレイライオン女の講義」(ライオンが朝礼で生徒に授けた講話の一部)、そしてごく短いものであるが「メレイライオン女の小言」となっている⁸⁾。いくぶん羅列的に題目が並んでいるが、ここでは一応、マウント・ホリヨーク・セミナリー関連、女子セミナリー拡張運動の例、そしてライオンの教えに大別し、後の2つを検討したい⁹⁾。

「亜非利加州に莫倣学校の開けしこと」には日本における女子教育への期待、具体的には女子セミナリー拡張運動への期待が、より直截に表明されている。この話の舞台はケープ植民地(現南アフリカ共和国)である。「ヒュグナートと名る一族」(フランスのプロテスタント、ユグノーの意)は信仰の故にフランスからオランダに逃れたが、そのうちの300人がさらにケープ植民地に移住し、開拓地を拓いた。この植民地は後にイギリス支配下に置かれたが、その地にあるウェルリントンという町の牧師夫妻がメアリ・ライオンの伝記を読んだ。彼らは二人の子を失い呆然としていたところだったが、自分たちの新しい任務を見だし、アメリカの友人を通して、ライオンおよびマウント・ホリヨーク・セミナリーに関する資料を集めた。そして自ら学校を起こすにあたっては、同校に教師派遣を依頼し、二人の教師を得た。学校設立資金の調達是有志らの寄付によったが、この地を開拓した始祖たちの記念碑を建設するために蓄えていた資金が女学校設立資金に転用されたことにより、この学校は「ヒュグナート校」と命名さ

れた。入学者の年齢や授業科目、宗教重視の方針等において、この学校はマウント・ホリヨーク・セミナリーに似ていた。さらに、この学校が女子教育普及の拠点となり、アフリカ大陸に同様な学校が11校も開校された。「亜非利加州に莫倣学校の開けしこと」では、神の導きを信じ、「抜山倒海の大志」をもって学校を設立したライオンの功績を再び讃えるとともに、その功績が万国に波及していることを指摘し、「教化の婦女子に行はるるは所以を原ればみなメレイライオンの余沢にあらざるものなし」、さらに「メレイライオンの名のつたはるところに何の地を問わず女子教育の整備ざる所なし」(125—126頁)と、ライオンと女子教育の関係を論じている。

ライオンの宗教上、道徳上の教えは伝記のそこここに分散して語られているが、「メレイライオン女の講義」と「メレイライオン女の小言」に一括して収録されることによって、ライオンの説く、信仰をもつ女性の生き方がより明確に提示されることになった。講義の題目は掲載順に、「聖書の勉強」、「肉と霊の種蒔」、「儉約」、「時限を違へぬこと」、「爾等何を喰はんと思ひ煩ふこと勿れ」、「爾等世に在ては患難を受ん」、「聖旨に任せ給え」である。

これらのうち「肉と霊の種蒔」では、他人のために働く場合に生じる自己犠牲の問題が取り上げられている。自分のことしか考えず他人を顧みない者は、この世で最も哀れむべき存在である。逆に、いかに苦勞しようとも他人のために「大なる聖徳の事業」をなすときは報いが大きい。しかし他人につくすことには自己犠牲が伴う。それは「己を忘れ思考と時間と感情と金銭を他人のために専用して」はじめて実行できることであり、例えば、「慈悲の業」をなすために「己の身の飾」を諦めなければならない事態も生じる。ややもすれば我々は「克己の最も少なき道」を選択しがちであるが、あえて犠牲の大きいものを求めよ、「若し行に二の道ありて孰を踏んで宜しきや疑わしき時は多くの克己の難を含めるものを選ぶべし」(132頁)と述べ、信者となり、キリストに倣って「四方に在る人々に善を盡すべし」、「人のためになすべき克己」を求めるべしと最後を結んでいる。また「爾等世に在ては患難を受ん」に曰く、キリストの生涯が苦しみと連続だったように、我々の人生も苦

渋に満ちている。しかし我々は神によって試みられ、受難を通して、神との間に「甚だ楽しき同感」(139頁)もつようになるのである。それゆえ決して受難を回避してはならない。おおよそこの世の中には3種類の苦しみがある。第一は罪から生じる苦しみ、第二は世俗の苦しみで、第三番目の苦しみは「義務の道を守ることより来たる所の苦」であるが、この第三番目の苦しみは「大いなる報い」(140頁)を与えてくれるところの苦しみでもある。さらに「爾等何を喰はんと思ひ煩ふこと勿れ」において、信者は、この世において安楽な生活は期待できないが、義務をつくそうとすれば、神は未来のことを気遣って下さると励ましている。ライオン自身が女子セミナリー創設を使命とし、「義務の道を守ることより来たる所の苦」を経験した人物であり、さらに彼女があくまで神のため人のためにセミナリーを運営していたがゆえに自己犠牲を厭わず、安い給料しか受け取らなかったことは、すでに伝記の中で紹介されていた。しかし今度はライオンが発した言葉として、お金や時間を惜しまず他人のためにつくすべきこと、そして受難を覚悟で「義務の道」を守るべきことが、あらためて強調されているのである。

さらに「儉約」と「時限を違へぬこと」では、「義務の道」を守ろうとする女性や、教師等として「世に出でて義務に當らんとするもの」(134頁)が任務を遂行していく上で必要な心構えや生活態度がより具体的に論じられていく。まずは「儉約」についてである。儉約とは何か入り用のために節約してお金を捻出するという一時的な方便ではなく、一つの厳重な主義である。それは「僅の費を以て程好く物事をそなへること」をさし、自ずと「能き判断の力」と「風雅の旨」(133頁)が求められる。儉約は貧富の別を問わず様々な生活レベルで実現されるべき徳目であり、女性がこれを守ることによって、「家内の快樂と便益と雅趣と風致と教育と新歩と施恵と善行」(133頁)が育まれる。儉約はまた「大に人の品格の上に善き風動」(134頁)をもたらすものであるから「世に出でて義務に當らんとするもの」にはとくに必要とされる。それゆえ生徒たちは規則や習練、模範を通してこれを修得しなければならないという。さらに儉約によって「施し」が可能になることも指摘されている。なかでも時間の儉約は最も重要なもので、

特に若い女性は「他人の時間を妨ぐるの癖」(136頁)を直さなければならないと忠告している。時間の問題は、さらに次の「時限を違へぬ事」でも扱われ、考えてから行動する習慣と時間厳守が求められる。なにか物事を起こそうとするにあたっては、まず「何を為し得るや及び何を為すべきや」(136頁)を考える必要がある。さらに時間を守ることが肝心である。わずか2、3分だからと遅刻することが重なれば、それが習慣となり、世に出てから社会の人々の信用を得られず、軽視されて、「自ら果して基督信者なるやと疑惑を抱く」(136頁)ようになってしまおう。ライオンはここに規則だった時間の過ごし方、スケジュールのある生活を勧め、用事があるときはその時間の「半分間前」(137頁)には支度ができているようにしなければならないと忠告し、時間を大切にすることは、人を助けることの第一歩であると結んでいる。「義務の道」を守ろうとする女性は、まず己の生活を律しなければならない。贅沢をしない、規則正しい生活からは、金銭的な施しをなす余裕と公益のために行動する時間が生じるということであろう。

さらに付録部分の最後に収められた「メレイライオン女の小言」(143-144頁)には簡潔で要を得たアドバイスが10項目ほど並んでいるが¹⁰⁾、これも女性の心構えや生活態度に関するものである。「善を求めて善を行へ」と「知識を求めて善を為さんことを勤めよ」は、善行の勧めであり、知識はあくまでその手段にすぎないことを表している。また「常に捷速にして狼狽へる勿れ」、「寧ろ道理に従て感情に導かる勿れ」、「小事に非常の感情を起さざるよう慎むべし」は、自分の感情をコントロールできる女性になりなさいという忠告であり、日々の生活に流されず、自分の行動を反省する時間をもつべきことが、「各日の終に謹んで爾等の行を省よ」で語られる。ここでも善行を求める、賢明で、自己を律することのできる女性が志向されていることが分かる。

このように付録部分では、アフリカの女学校の例を挙げて女子教育振興の意欲を煽るとともに、信仰をもつ女性の生き方が、すなわち他人のため社会のために自己犠牲を厭わず働く「義務の道」を守る女性や「世に出でて義務に當らんとする」女性の生き方が、生活習慣にまで言及しつつ論じ

られているのである。

日本女性へのメッセージ

以上が『メレイライオン一代記』の内容紹介である。日本に派遣された女性宣教師たちはセミナリー教育の独自性を主張し、自分が受けたような教育を日本の女性にも与えたいと願ったわけであったが、第10章と第11章は伝道と教育が一体化した学校の源初的な形が描かれているという点で興味深い内容となっている。しかしながら、日本語版ライオン伝の主題はむしろ女性にとっての志や使命感の問題に求められ、それが神から与えられた義務だと感じるとき、女性も社会的貢献をなしうるのであり、そのために備えをすること、耐えること、そして決断することが必要であると訴えていると思われる。ライオンの伝記自体が高尚な志をもつ女性の生き方を紹介するものであり、さらに付録部分に収録されているライオンの教えも「義務の道」を説き、女性の伝道活動や社会的貢献を励ます内容であった¹¹⁾。確かに、この『メレイライオン一代記』では、女性の生涯を語るにあたり、臆せず、正面きって「大功」あるいは「大事業」といった言葉を用いていたのが印象に残る。私利や功名心のためではなく、公のため社会のためであれば、女性でも大事業を目指すべきである。しかしながら、それを実現するには、試練を克服する気概と忍耐力が求められる。さらに自覚や意欲ばかりでなく、経験と能力、合理的な生き方(能率的な行動パターンや時間の有効利用)が必要となる。そこまで踏み込んで、「義務の道」を守ろうとするものや「世に出でて義務に當らんとするもの」の心構えを説いているのが、この本の面白さであろう。

実際、ライオンがマウント・ホリヨーク・セミナリーの教育で目的としたところは、自己犠牲を厭わず、自分を律し、社会のために貢献できる人材の育成だった。マウント・ホリヨーク・セミナリーの50年史には、ライオンの生徒の回顧が、次のように紹介されている。

One great principle which she [Lyon] inculcated was the subordination of individual inclinations to the welfare of the com-

munity. It made it easy to observe rules. Minor inconveniences were more than balanced by the habit of exalting the general good above our private preferences. But beyond this was that noblest of all lessons, self-sacrifice. But by precept, by example, and by occasions for their practice, the Christian duty and the value of self-sacrifice were impressed upon us. The remark, "We must always consider the good of the whole," was repeated so often that it became a proverb.¹²⁾

ライオンの学校では、キリスト者としての義務と自己犠牲の精神がたたき込まれ、個人の不便や好みを越えたところで、善行が求められたのである。さらに別の生徒は、マウント・ホリヨーク・セミナリーの教育の特徴は「有用な」人材の育成にあると語っているが、そのために生活規律が重視されていたのだった¹³⁾。しかしながら善行は身近なところでも実行可能な徳目であり、海外伝道との関連でいえば、ライオンの教えや生き方が、生徒たちにとって、あえて困難を選ばせる動機づけになったことこそが説明されるべきであろう。マウント・ホリヨーク・セミナリーでは志をもつ女性の生き方が説かれ、「信仰と勇奮」が鼓舞されていたことを、日本語版ライオン伝は強調していた。すでに引用した言葉であるが、世のため人のために、「若し行に二の道ありて孰を踏んで宜しきや疑わしき時は多くの克己の難を含めるものを選ぶべし」(132頁)とライオンは女生徒たちに奮起を促していた。またライオンの書簡からは、セミナリー開設を決意するまでは、彼女が、いま自分がどこで最も必要とされているかを常に自問自答していたことと、いったん自分の目的に向かって行動を開始してからは、総てを神の導きに委ねるという態度で臨んでいたことが分かる¹⁴⁾。実際、同校でライオンの指導を受け、彼女の使命感に裏打ちされた真摯な生き方に接した生徒たちは、彼女をロール・モデルとし、自らもそれに倣おうとしたのだった。また女子セミナリーの教育は男女性別役割分業を大前提とし、その主眼とするところは女性教師と教養ある良妻賢母の養成だったが、ライオンが重視したのは教員養成の方であった。しかもラ

イオンにとって、教職は善意と義務感から担うべき聖なる職業を意味し、広いアメリカのどこにでも赴任する覚悟が生徒には求められていた。それゆえ、生徒たちは、そこで自分が最も必要とされていると思う場合、あえて海外に赴くのも辞さなかったのである¹⁵⁾。さらにライオン自身が海外伝道の熱心な支援者だった結果、マウント・ホリヨーク・セミナリーは、宣教師の妻として、あるいは宣教師として海外伝道に従事する者を多数輩出したのだった。教育を受けたアメリカ女性にとって宣教師の仕事は職業選択肢の一つだったわけでもあるが、これを選ぶにあたっては、自活の必要や漠然とした異国へのあこがれの他に、『メレイ・ライオン一代記』に見いだされるような「信仰と勇奮」の鼓舞が遠心力として働いていたことも忘れられてはならない。ちなみに明治期に来日したマウント・ホリヨーク出身の女性宣教師は48名を数えたのだった¹⁶⁾。

ライオンをロール・モデルとした女性はマウント・ホリヨーク出身者以外にもいた。例えば、長老派宣教師のマリア・ツルー¹⁷⁾がその人である。1888年、女学雑誌社主催による第2回女学演説会の講演において、ツルーは、日本女性が困難を乗り越え地位向上を実現していくためには、自分の果たすべき役割を自覚し、それを実行に移すことのできる女性、自己犠牲を省みず、社会に貢献するような女性にならなければならないと説いた。この演説の内容にはライオンの教えをほうふつさせるものがあるが、そればかりでなくツルーはこれの中で直接ライオンに言及している。ツルーが理想としたのは「高尚なる志」をもった「正しき働」をなす女性であり、この女性は志を遂げるために「真の力」(実力)と「誠の力」(誠意)を兼ね備えていなければならない、かつ積極的に「正しき働」をなすために「活発の気象」(行動力)も求められた。この演説でツルーは女性のタイプとして「無学なる女」「馬鹿らしき女」「驕る女」「怠惰なる女」「臆病なる女」「大膽なる女」などを挙げた上で、最後に「又メレイ・ライオンの申しし如く己の務めを怠り己のなさざる可らざる事をなさずして送るはもっとも苦痛とする夫人もあります。アナタ方はこの数々の中に於いて何れを採り、いずれを模範とせられますかお尋ね申します」と結んだ¹⁸⁾。ここに引用されたライオンの言葉は、死を間近か

にしたライオンが学校の人たちを集め、自分の死が生徒たちに動揺を与えないようにと願って語られた言葉だった。『メレイライオン一代記』では、神の思召しによるものであるから、死を恐れてはいけなと述べた後に、「われら此世に於て畏懼るべきものなし只義理を知らざることとこれを知りて行くことを得ざることをのみ畏懼るべし」(100—101頁)¹⁹⁾と記載されている箇所である。ライオンの生徒たちへの遺言が、自分の任務を自覚し、それを行動に移しなさいという忠告だったことは、『メレイライオン一代記』に込められた日本女性へのメッセージと重複していて、興味深い。さらにツルーもまたこの忠告を採り、日本女性に選択を迫ったのだった。

最後に、ライオンの伝記を読み、女学校創設に乗り出した日本女性がいたことを紹介しておこう²⁰⁾。キリスト者であった徳富久子(徳富蘇峰、蘆花兄弟の母親)は、自分の置かれてきた境遇から女性の社会的地位に対して不満をもち、女性の地位向上と女子教育の必要を感じるようになっていた。そうしていたところ東京から『メレイライオン一代記』が届き、目が悪かった久子はこれを読んでもらい、大いに感激し、自らも女学校設立に向かって行動を開始したのだった。このところの事情は、徳富蘆花(健次郎)の手によって次のように記されている。「京都、大阪、神戸、長崎などには、耶蘇教の女学校があります。然し熊本にはそれがありませんでした。熊本に是非女学校を興したい。耶蘇教主義の女学校を興したいと久子は思い込んで居りました。丁度東京から米国の女子教育家メェリィ・ライオンの伝が送って来ました。それを読ませ聞き、久子はいよいよ其の決心を固めました」²¹⁾。かねてから女子教育に関心を持っていた久子は、ライオンの生き方と女子教育の志に感銘を受け、義務を感じる者として自ら行動することを決意したのであろう。その後、久子は長男である蘇峰(猪一郎)が『国民之友』発刊のため上京するのに伴い東京に転出し、女学校開設は久子の実姉である竹崎順子の手に乗ねられた。伝記の翻訳を通して、ライオンは日本女性にも直接的にロール・モデルとして提示されたわけであるが、『メレイライオン一代記』に描かれたライオンの使命感は徳富久子を動かし、竹崎順子の下で熊本女学校が開校される道を拓いたところのものだっ

た。さきに指摘したように、『メレイライオン一代記』は女子教育の進展を願って出版された。だがその必要性は正面から論じられているわけではなく、むしろ女子教育の振興者であるライオンへの共感を通して、女子教育への関心を高めようとしたものだった。この点で、徳富久子は、それが神から与えられた義務なのであれば、女性であっても大事業を目指すべきであるという、ライオン伝に込められた「信仰と勇奮」のメッセージを文字どおりに受けとめ、行動した人物とみなすことができるのである。

おわりに

ライオンの伝記は女性のロール・モデルを伝える一つの媒体だったわけであるが、日本語版のライオン伝にはどのような特徴が見いだされるであろうか。英文のアメリカ・トラクト協会版のライオン伝との詳しい比較については稿を改めて論じるつもりだが、「大功」や「大事業」といった言葉を多用している『メレイライオン一代記』の方はかなり立志伝的色彩の濃いものであり、ライオンの信仰に基づく社会的活動の教えは、女性にとっての志や使命感を強調する形で説かれている。そしてその立志伝的な語り口のゆえ、読後には社会において有用な人材にならなければといった焦燥感すら残される。ライオンから女性宣教師へ、そして日本女性へとつながる伝道と教育を使命とする女性たちの系譜において、このように積極的で行動的な女性信者のあり様が高い評価を受けてきたことは、日本女性に伝えられたプロテスタント・キリスト教の性格になんらかの影響を及ぼしたと考えられる。いずれにせよ近代日本においてアメリカ女性の伝記がそのまま日本女性のロール・モデルとして通用する時期は限定されていたとはいえ、ライオンの信仰に基づく社会的活動の教えは、「私」や「家族」を越えた広い社会への関心を必然のものとし、教育の分野を越え、総じて明治期の女性キリスト者のアクティヴィズムにつながるものであったといえるだろう。

註

- 1) J. T. Gracey, *Eminent Missionary Women* (New York: Eaton & Mains, 1898), pp. 1-9. なお

- ライオンについては次の文献も参照した。Sydney R. MacLean, "Mary Lyon," in *Notable American Women, 1607-1950*, ed. Edward T. James et al. (Cambridge: The Belknap Press, 1971), II, pp. 443-447; Kathryn Kish Sklar, "The Founding of Mount Holyoke College," in *Women in America*, ed. Carol R. Berkin and Mary B. Norton (Boston: Houghton Mifflin Company, 1979), pp. 177-201; Willystine Goodsell, *Pioneers of Women's Education in the United States* (1931; New York: AMS Press, 1970), pp. 227-303.
- 2) MacLean, *ibid.*, p. 444; Arthur C. Cole, *A Hundred Years of Mount Holyoke College* (New Haven: Yale University Press, 1940), pp. 14, 21-22, 348.
- 3) *The Power of Christian Benevolence, Illustrated in the Life and Labors of Mary Lyon* (1851; New York: American Tract Society, 1858), p. 3.
- 4) 本稿作成にあたっては、神戸女学院大学ミッション・ライブラリー所蔵の『メレライオン一代記』を利用させていただいた。ここにあらためて謝辞を表したい。なお原文中の変体がなほ適宜現代かなづかいに直して引用した。以下、この本からの引用は、本文中括弧内にページ数を記す。
- 5) 秋枝蕭子「『鹿鳴館時代』の女子教育について」『文芸と思想』29号(1966年)、42-44頁。
- 6) ジョセフ・エマソン (Joseph Emerson, 1777-1833)は牧師の職を辞し、1816年にマサチューセッツ州のバイフィールドに女子セミナリーを設立、ライオンは1821年にこの学校に入学した。それまでライオンは知識を吸収することに夢中だったが、エマソンの徳育と知育の調和のとれた教育方針に出会い、教育観が変化し、後に勤めた学校ではその教育方針を採用した。*The Power of Christian Benevolence* (1858), pp. 35, 46.
- 7) フィデリア・フィスク (Fidelia Fiske, 1816-64)は1839年にマウント・ホリヨーク・セミナリーに入学、卒業後も教師として同セミナリーに留まりライオンの右腕として活躍していたが、1843年に宣教師としてペルシアに転出した。詳細については、Gracey, *op. cit.*, pp. 23-37; Mary S. Benson, "Fidelia Fiske," in *Notable American Women*, I, pp. 624-625.
- 8) これらがどこから採録されたのかは現時点では不明であるが、「メレライオン女の講義」と「メレライオン女の小言」についてはそれぞれ、アメリカ・トラクト協会版の *The Power of Christian Benevolence* (1858) に掲載されている "Sentences from Her Lips, Noted by One of Her Pupils" (pp. 369-376) とライオンが自己反省に使用した覚え書き (p. 354) の内容に類似している。
- 9) 本文で取り上げなかった題目を簡単に紹介しておく。「本校卒業生の或人々近來親睦会を開きしこと」は、「メレライオン^{にさんねん}没するの後凡そ三十年を過ぎし頃即ち今より数年前のことなり」(109頁)の記載から推定するところ、1880年頃に開催された同窓会で披露された、ライオンの思い出話を幾つか収めている。「創業より今日迄入学生の概算」では、マウント・ホリヨーク・セミナリー開設以来40年間の卒業生の進路を紹介している。同セミナリーの教師となった者は800人、他校で教師となった者は1,700人余り、海外伝道に携わった者は150人、卒業後医学を修得した者は25人、卒業のみの者は2,000人余りと報告されている。これらの数字から、卒業生の半数以上が教師となったことと、各年度の卒業生のうち3、4人は海外伝道に従事したことが分かる。
- 10) この他、家庭のことをおろそかにせず家事に熟練すべきこと、だらしない格好をしないこと、他人の関心をひくようなことは避けること、偏屈な性格は改めるべきことが述べられている。
- 11) もちろんライオンは総ての女性に大志を抱き、それを成就せよと説いていたわけではない。あくまでそれは自分の体力や能力の範囲内で実行可能であればという条件付である。「本校卒業生の或人々近來親睦会を開きしこと」には、マウント・ホリヨーク・セミナリーの卒業生たちが「四方に出でてみな世のために労役せし」(110頁)を見聞し、貧しいながらも自分もそこで学びたいとの「志念」(111頁)をもった少女のエピソードが紹介されている。彼女はライオンの尽力により学費援助を得て同校への入学を果たしたものの、もともと身体が弱かった上に、心臓病になり退学せざるをえなかった。この女生徒はライオンから、身体のことを考えれば「大なる服役を望むは却って神の旨にあらず」となぐさめられ、その後は「耶蘇基督のために竭すところの微小の労事」(113頁)に満足し、喜びを感じるようになったという。
- 12) Sarah D. Stow, *History of Mount Holyoke Seminary... during Its First Half Century, 1837-1887* (South Hadley: Mount Holyoke Seminary, 1887), p. 121.
- 13) *Ibid.*, pp. 126-127.
- 14) *The Power of Christian Benevolence* (1858), pp. 112, 138, 147.
- 15) Stow, *op. cit.*, pp. 128; *The Power of Christian Benevolence* (1858), pp. 267-268.

- 16) 齊藤育子「明治期『キリスト教主義女学校』に対する米国マウント・ホリヨーク・セミナリー出身者の影響」『日本比較教育学会紀要』10号（1984年）、89頁。
- 17) マリア・ツルー（Maria True, 1840-1896）、米国ニューヨーク州生まれ。農家の出身で、早くから小学校で教鞭をとり家計を助けた。日本伝道を志しながら若くして亡くなった夫に代わって、海外伝道を志願し、中国で伝道活動にあたった後、1876年（明治9年）に来日した。最初は婦人一致外国伝道協会の所属であったが、後に長老派の外国伝道協会に転籍した。大濱徹也『女子学院の歴史』（1985年）、133頁。
- 18) この講演は「善良なる模範の価値」として、『女学雑誌』72号（明治20年8月20日）に掲載された。同上、190—193頁。
- 19) 英文では、“There is nothing in the universe that

I am afraid of, but that I shall not know and do all my duty.”という表現が用いられている。*The Power of Christian Benevolence* (1858), p. 334.

- 20) これについては、前出の齊藤論文、90—91頁と、碓井知鶴子「明治前半期のキリスト教女子教育にみる外国文化の一形態」『比較教育試論』3集（1969年）、46—47頁にすでに指摘されている。なお齊藤論文は、熊本女学校の創建期には実際にマウント・ホリヨーク・セミナリー出身の女性宣教師たちが教鞭をとり、同セミナリーの教育方法が採用されていたことを“domestic arrangements”に焦点をあて解明している。

- 21) 碓井論文（90頁）から引用。

（本稿は、1993年9月17日に開催された第44回キリスト教史学会シンポジウム「女性宣教師と教育」で発表した内容に加筆したものである。）